

横山 須美

Yokoyama Sumi

(長崎大学 原爆後障害医療研究所)



4月、新しい年度の始まりである。桜の花もほころび、冬の寒さも一段落して、気持ちもあたたかくなっていると良いなと思う。2023年を振り返ると、新型コロナが5類へ移行し、筆者も含め多くの人が、少しずつコロナ前の日常を取り戻しつつあったかと思う。対面での会議や学会に出席する機会も多くなり、久々に顔を合わせ、雑談の中での新しいひらめき等、その楽しさも新鮮であった。

一方、新型コロナが確認されてから4年経過したが、変異を続け、その感染力は依然として強く侮ることができない状況である。世界的にはロシアのウクライナ侵攻については終わりが見えず、物価も高騰している。また、年明け早々には、能登半島での地震、そして、航空機の衝突事故と心痛ましい出来事が立て続けに起きた。震災及び事故で尊い命が失われたことに対して心よりお悔やみを申し上げると共に、地震により被災されたみなさまにお見舞いを申し上げたい。能登半島地震については、この原稿を書かせていただいている(1月17日)時点では、行方不明者の捜索が続いており、被害規模の全貌は把握できていない。全壊した家屋も多く、被災者の方々は避難先で先の見えない生活を強いられている。衛生状態の悪化、感染症の拡大、健康への不安等も懸念され、2次避難も検討されている。政府は支援のため2024年度予算の予備費を増額することを決定したが、インフラの整備には時間がかかり、生活再建までには長期化が予想される。今回の出来事は、東日本大震災に比べて被害地域は限定的であるものの、家屋倒壊、津波や火災等、当時のことを彷彿とさせ、自然災害の脅威の前に虚しさや私たちにできることは限りがあることを痛感させた。ただ、報道を見ていると、住民の津波への迅速な対応や被災者への支援等、たしかにこれまでの教訓が活かされていると感じたシーンも垣間見られたことはせめてもの救いである。そして、複合災害としての原子力発電所事故の脅威である。震災のあった地域には志賀原子力発電所が存在する。本会員の中にも原子力災害対策要員等として携わっておられる方も多くおられるであろう。幸いにも大事には至らなかったが、地震発生直後は緊張が走った。筆者もそのハシクレの一人であるが、安全上重要な影響はなかったとの報告を聞いてほっとした。

現在、原子力発電所は福島第一原子力発電所事故を踏まえて策定された新規規制基準への適合性についての審査が行われ、既に再稼働をしているもの、今まさに審査中というものがある。今後は、能登地震に関する知見も追加的に考慮され審査や見直しが行われていくことになろう。また、原子力防災計画についても見直しが行われているところである。日本に住んでいる以上、地震から逃れられないことは承知している。しかし、つい日常の忙しさに紛れ、その準備が後回しになってしまう。他人事としてではなく、自分のこととして日ごろから災害時になすべきことは何かについてよく考え、もっともっと知識や能力を高めておく必要があることを改めて実感した。首相の被災地視察時の記者会見での発言に、「防災の備えに終わりや完璧はない」というものがあつた。どんなに高みを目指し、改善されても、そこには人が予想もしないほころびができるものである。そのほころびをどのように補うことができるのか。解決には原子力災害のことだけを考えていてもだめであろう。究極を言えば、人としてどうありたいのか、どうあるべきなのか、なのだと思う。何気ない日常の気づきを見逃さない、人とのコミュニケーションを大切になど。まだまだ足りないものだらけである。